

古文入門教材『竹取物語』の文学史

—「物語の出で来はじめのおや」をめぐる—

本 橋 裕 美

はじめに—教材としての『竹取物語』

平成二〇年度版学習指導要領で新設された「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は、その理念以上にシステムとして二つの大きな変化をもたらした。一つ目は小学校での古典学習が設定されたこと、二つ目は一つ目に伴って「古典」なるものの範囲が拡大したことである。旧学習指導要領版国語教科書でも、小学校高学年においては、狂言や文語調の詩、あるいは短歌、俳諧、俳句など「伝統的な言語文化」に分類できる教材は多くあったが、小学校低学年からの系統的な古典学習が求められることになったため、昔話や神話・伝承あるいは歌舞伎、落語などが新たな教材として国語科に入り込んだ。それらの教材は「作品」という単位に適合しない。かろうじて神話は『古事記』や『風土記』に出典を求められることができるだろうが、その他の、特に特定の場で享受される芸能を国語科として扱うことは困難を極めよう。これらの新しい教材と児童との出会い方、すなわち教科書における紹介方法が古典イメージの形成に大きな役割を担うことは疑いない。

実のところ、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」導

入による小学校国語教科書の変化という点では、大きな混乱もなく実施が進んだといえる。当初、不安視された小学校教員の負担や古典嫌いの子どもを中学校に送り出すことへの危惧は概ね杞憂に終わったと見てよい。小学校で古典に触れた児童、生徒が、そのことよって、以後、古典を忌避する傾向を見せた例は寡聞にして知らない。私自身の経験としては、小学校では面白がっていれば良かった古文や漢文に知識や体系的な解釈が求められるようになった時、むしろ「古典嫌い」が発生するように思う。この壁といかに向き合うべきかは改めて考えていかなければならない課題である。

本稿で扱うのは、中学校一年生の定番教材『竹取物語』である。小学校教科書においても冒頭部などが音読教材として掲載されている（注1）。古文入門教材として名高い『竹取物語』は中学校国語教科書五社すべてに掲載され、義務教育を受ける同年年の生徒ほぼすべてが教時間に亘って『竹取物語』に親しみ、古文学習の世界へと足を踏み入れていく。いろは歌などを『竹取物語』の前に組み込むものもある（注2）が、漢文入門に多少の幅があること（注3）と比較すると、この足並みの揃い方はまさに共同体と

して受け継がれるものとしての「古典」が生成する現場が学校にあることを示している。だが、重要な「古典」となる『竹取物語』は、成立の上でも解釈の上でも不安定さを抱えた作品である。入門教材である『竹取物語』の教材化について、その紹介方法と文学史的位置づけから考察し、「伝統的な言語文化」のあり方について考える一助としたい。

一、各教科書における『竹取物語』の位置づけ

学校図書 (学図)	「姫の物語? 翁の物語?—竹取物語」 現代語による紹介、概要。本文は冒頭、帝との交流、昇天、末尾。
教育出版 (教出)	「物語の始まり—竹取物語—」 現代語による紹介、概要。本文は冒頭、昇天。
三省堂 (三省)	「竹取物語」 現代語による紹介、概要。本文は冒頭、昇天。
東京書籍 (東書)	「竹取物語」 現代語による紹介、概要。本文は冒頭、昇天。
光村図書 (光村)	「蓬莱の玉の枝—竹取物語—から」 冒頭、現代語による概要、くらもちの皇子、末尾。

まず、中学校国語教科書(平成二十四年度版)五社における『竹取物語』の教材化について検討していきたい。各教科書会社における掲載方法を簡単にまとめると、上の表にまとめたとおりである(注4)。

各教科書に共通するのは冒頭の掲載であり、どの場面を切りとるかという点でも差はある。だが、本稿で注目したい差異は、現代語による紹介文だ。『枕草子』や『平家物語』といった中学校の古文教材は、現代語による解説文を持つものが多い。特に物語において前後の文脈の説明は不可欠であり、『竹取物語』の場合も省略される求婚譚や帝との交流など、概要の占める割合は高い。一方で、『竹取物語』とは何か、古文を読むとはどういうことかという入門教材としての姿勢が提示されている点は、やはり『竹取物語』の特徴といえよう。各教科書における『竹取物語』の導入にあたる紹介文をみてみたい(注5)。

【学図】↓絵本「かぐや姫」と『竹取物語』の関係

(絵本掲載ののち) 右の絵は、『竹取物語』を基にした絵本の冒頭の部分です。/「えっ、『かぐや姫』じゃないの?」/そうです。私たちが絵本で親しんできた『かぐや姫』は『竹取物語』のことです。千年以上も前に書かれた作品が、絵本の形で今に伝えられているのです。

【教出】↓「物語」とはなに

「物語」という言葉を知らない人はいないでしょう。小説や映画、テレビドラマの題名や、ゲームの名前にも物語という言葉はよく使われます。いったいいつ頃からこの言葉は使われるようになったのでしょうか。/紫式部が平安時代に書いた『源氏

物語』の中には、『竹取物語』こそが「物語の出できはじめの親」だと記されています。『竹取物語』は、『源氏物語』の百年ほど前、平安時代の初めに書かれました。この時期に仮名文字が成立し、それを使ってさまざまな思いを表現できるようになったのです。

【三省】↓昔話と話型、「古典」という概念

日本には、「むかしむかし、あるところに……。」と始まる古いお話がたくさんあります。「浦島太郎」「桃太郎」「瓜子姫」……。これらのお話は、それこそ「むかしむかし」から多くの人に語り継がれ、読み継がれてきました。／かぐや姫のお話もその一つで、もとは似た話がたくさん言い伝えられていたようです。「竹取物語」は、約千百年前に、それらをもとにつくられた「古典」です。

【東書】↓伝説や昔話と「竹取物語」

「竹取物語」は、平安時代の十世紀初めごろに作られた、今に伝わる日本で最も古い物語です。作者は分かっていますが、教養のある貴族が、当時よく知られた伝説をもとに作り変えたのだと思われます。／「源氏物語」では、「竹取物語」は「物語の出で来はじめの祖」とも呼ばれ、のちの物語にも影響を与えました。また、現代に伝えられている昔話の中にも、小さな子を見つけて育てると裕福になった話や、よその世界から来た者が最後には元の世界に帰っていく話など、「竹取物語」とよく似た話があります。

【光村】↓日本最古の物語としての「竹取物語」

（冒頭掲載ののち）これは、現在伝わっている日本の物語の中では最古のものといわれている「竹取物語」の冒頭部分である。

それぞれの教科書ごとのコンセプトの違いが明白になろう。『竹取物語』という作品と向き合うにあたっての指針が予め記されているのである。キーワードとしては「昔話」が指摘できるが、文学史的な説明という点では、【学図】や【三省】はかなり危うさを含んでいる。『御伽草子』等にほとんど見られない『竹取物語』がこのように素直に昔話として位置づけられるかは断定しがたく（注6）、我々が絵本で「かぐや姫」に親しんでいるのはむしろ学校教育の場で『竹取物語』が読まれてきたからに他ならない。小学校からの系統的な「伝統的な言語文化」学習の観点から昔話との連続が試みられているのだろうが、この接続はかなり乱暴なものといえる。

もう一点確認しておきたいのは、主張される「古さ」である。これは傍線で示したように、五社すべての教科書に共通する。「成立が千年以上前の古い物語」であることは『竹取物語』の教材化を支える重要な要素といえる。本来、鎌倉時代の写本しかなく、善本といえるものの少ない『竹取物語』の成立は不確定要素を多く含む（注7）。平安時代に読まれていただろう『竹取物語』に我々は接することができないのである。そうした懸念を置いておいて、各教科書が『竹取物語』の「古さ」、あるいは古典としての価値を称揚できるのは、より確かな古典である『源氏物語』が『竹取物語』を保証しているためだろう。二重傍線部で示した「物語の出で来はじめのおや」という言葉である。【教出】と【東書】が引用した教科書本文中に、【学図】が脚注と出典の項に、【光村】が出典の項に、『竹取物語』を位置づける評として掲載する。【三省】のみ、生徒に見えるかたちでの呈示はなく、教師用指導書の作品解説に見える。

『竹取物語』に、枕詞のように冠される「物語の出で来はじめのおや」という言葉について、改めて考えてみたい。

二、『源氏物語』総合巻の文脈

「物語の出で来はじめのおや」という表現が登場するのは、『源氏物語』総合巻である。この総合巻の主眼は、世間には隠されているが実は光源氏の子である冷泉帝の後宮をめぐる権力闘争を、文化的営為に置き換えて華やかに演出することにある。同時代的な物語の享受や評価を知る上でも、絵画文化を知る上でも、非常に興味深い記述を多く含む。もちろん、物語進行の点でも重要な巻である。問題の箇所は、後宮で絵画蒐集が流行した結果、寵愛を二分する斎宮女御方と弘徽殿女御方で右左に分かれて物語絵合を行った場面である。冷泉帝の母・藤壺中宮も参加し、女性たちの隠されたイベントとして開催される（注8）。

まづ、物語の出で来はじめのおやなる竹取の翁に宇津保の俊藤を合はせて争う。「なよ竹の世々に古りにけること、をかしきふしもなければど、かぐや姫のこの世の濁りにも穢れず、はるかに思ひのぼれる契りたかく、神世のことなめれば、あさはかなる女、目及ばぬならむかし」と言ふ。右は、かぐや姫ののぼりけむ雲居はげに及ばぬことなれば、誰も知りがたし。この世の契りは竹の中に結びければ、下れる人のことこそは見ゆめれ、ひとつ家の内は照らしけめど、もししきのかしこき御光には並はずなりにけり。阿倍のおほしが千々の金を棄てて、火鼠の思ひ片時に消えたるもいとあへなし。車持の

親王のまことの蓬萊の深き心も知りながら、いつはりて玉の枝に瑕をつけたるをあやまちとなす。（総合②三八〇—一）

光源氏が支援する斎宮女御（左）方が提出したのが「物語の出で来はじめのおやなる竹取の翁」である。相手（右）方は『うつほ物語』俊蔭巻。二番では『伊勢物語』に『正三位』という作品が争われていく。

藤壺中宮も参加する絵合とはいえ私的なもので、実際に論評するのは女房たちである。ここで描かれる争いとは、いかに上手く味方の絵を褒められるか、また相手方の絵の難点を指摘できるかに収斂する。左方は点線部のように言葉遊びによって「竹取の翁」を称揚するが、波線部で示した右方の評はより作品内容に深く踏み込みつつ、難点を並べ立てる（注9）。結局のところ、この一番に勝敗はつかないが、遣り取りだけ見れば左方の完敗だろう。

「物語の出で来はじめのおや」とされた「竹取の翁」は、つまり論破されてしまうのである。主張されるのは、竹の中に生まれただかぐや姫の卑しき、求婚者たちの浅はかさ、そして帝の求婚に応えなかったこと。この絵合の場が宮中である以上、最高の存在は帝である。しかも、物語内では二人の女御が立后をめぐって寵愛を競っている。かぐや姫を称揚することは、后になるという素晴らしさを否定することとして難じられてしまう。

ここでもう一つ、『源氏物語』蛍巻にある、物語の始まりについて言及する場面を見てみたい。光源氏は物語に熱中する女たちを見ながら次のように述べる。

「その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなけれ、

よきもあしきも、世に経る人のありさまの、見るにも飽かず聞くにも余ることを、後の世にも言ひ伝へさせまほしきふしぶしを、心に籠めがたくて言ひおきはじめたるなり。よきさまに言ふとてはよきことのかぎり選り出でて、人に従はむとてはまたあしきさまのめづらしきことをとり集めたる、みな方々につけたるこの世の外のことならずかし……(蜚③二二二)

蜚巻もまた物語論を繰り広げる巻であるが、この光源氏の発言は作り手と読み手とをめぐって興味深い。直接モデルの名を明かすことはなくても、人々の有様で後世に残すべきと思うことを心に留めかねて言葉にしたものが物語であり、過剰に褒めることも、読者の声に応えてまたとない悪いことを一身に集めることもあるけれど、すべてはこの世と連続したものだという論である。光源氏の言葉の中心は、物語世界と現世との連続性にあるが、ここでは読者と作り手の連続性にこそ注目したい。実態はともかくとして、理論上、読者はモデルであり、時に作り手としても参加する。

平安時代の宮中は紛れもなく物語の享受と生成の場であった。絵合の場の議論は物語が作り上げられていく過程であり、「物語の出で来はじめのおや」である「竹取の翁」は、その子孫たちによって否定され、読み替えられていく。「物語の出で来はじめ」という表現をそのまま肯定的に受け止めるのは、極めて現代的な感覚である。読み手と作り手が投影し合い、連動する、宮中女性たちの物語空間において、「竹取の翁」は古いがゆえに遠さを孕み、欠点が見出される(注10)。

『源氏物語』の表現は、確かに『竹取物語』に類するものが平

安時代に存在したことを保証しよう。一方で、「物語の出で来はじめのおや」という表現が単なる成立を示すものでも、まして古さを称揚するものでもないことも明白だ。乗り越えられ、革新されるべき「物語」なのである。読み手であり、作り手である女性たちの生に肉迫するものとしての「物語」の性質を無視して一節を切りとることに、まずは批判的な目を向けておきたい。

三、「竹取物語」の文学史説明に向けて

『源氏物語』の文脈の中での「物語の出で来はじめのおや」という表現を確認した。成立の古さ自体を保証するという点では、確かに問題のない記述である。では問題の所在はどこかといえれば、やはり物語が女性たちのものであったという点に尽きる。作り手にも読者にも、もちろん男性はいいた。『竹取物語』の作者も男性官人であったとする説が強い。だが、少なくとも『源氏物語』に由来する「物語の出で来はじめのおや」を持ち出す時には、絵合の場の女性たちという文脈が背後にあることを忘れてはならない。『源氏物語』に限らず、『竹取物語』の享受空間は長く作り物語の世界にあった(注11)。性差のない古典入門として提示するために、『竹取物語』が抱える文学史を無視してよいものだろうか。

『竹取物語』に注目する背景には、中学校の古文教材の偏りがある。散文に限れば、古文学習は『竹取物語』に始まり、『枕草子』『平家物語』『徒然草』『おくのほそ道』と(多少の異同はあれど)進んでいくのが定番である。説話や古今集仮名序、著名な作品の冒頭の掲載も一部あるが、作り物語を教材としたものは非常に少ない。高校国語教科書においても仮名日記や歴史物語、説話の比

重が圧倒しており、前後の文脈や登場人物の複雑な作り物語は『源氏物語』に至ってようやく中心に置かれる。作り物語を読む行為は古文学習の一つの到達点となっていて、『竹取物語』はその到達点から振り返って価値づけられているに過ぎない。『源氏物語』を頂点とする古典文学の中からは気づきにくい円環構造によって、中学生の古文学習は始められているのである。

では、『竹取物語』はどのようにして位置づけられていけばよいのか。『竹取物語』を切り捨てるのも一つの選択肢ではある。一方で、児童生徒の国語学習の根幹である仮名散文に対する(むしる教員側の)ロマンは捨て難いようだ。教材価値について、たとえば『三省』の指導書では「教材提出の意図」として次のように述べられている。

古典の入門としては最適な物語である。

生徒がストーリーを知っている。古典的な「人の心の普遍性」が語られている。使用されている古語や主語等の省略における難度も高くない。会話を織り交ぜたりリズムも良い。中学1年生の入門期に提示する古典としては、竹取物語は最もふさわしいものであろう。

前述のように、『竹取物語』はテキストの安定度からしても、内容におけるいくつかの不明点からしても、入門期の生徒にとって易しいとは言いが、入門教材としての評価は比較的高水準である(注12)。教材に対する愛着や蓄積を生かしたまま『竹取物語』との出会いを豊かにするためには、やはり文学史的理解を含めた紹介文によって古典学習をスタートさせていく必要がある。各教

科書が『竹取物語』から始まる古典学習を無自覚に礼讃しているわけではないことは、それぞれの特色から見るとれる。【学図】は「語り手」概念を用いて「かぐや姫から竹取物語へ」という道筋を試みているし、【教出】は「物語る」という言葉への注意を喚起している。敢えて「蓬萊の玉の枝」を題に持つ【光村】も、くらの皇子が物語を作っていく現場を載せるという点で挑戦的ではある。しかしながら、中学1年生の発達段階を加味するせいか、いずれも消化不良に終わる上に、教室でどこまで生かされているかは定かでない。教科書を超えてより豊かな古典の授業が展開されている教室ももちろんあるだろうが、紹介文は一読で終わり、原文の説明や音読に多くの時間が割かれている可能性も低くない。改めて問題点を述べよう。生徒に古典イメージを形成する『竹取物語』という教材は明らかに現代人にとつての「古典」の具現化である。そして、生徒たちがそのイメージを支える『源氏物語』に出会うのは義務教育を終えてからであり、『竹取物語』が『源氏物語』の中で(あるいは他の作り物語の中で)どのように語られるかを見つめる機会を持たないまま教育を終えることは極めて多い。中学校で『竹取物語』に合わせて『源氏物語』絵合巻をやるのが難しいのだとすれば(注13)、入門教材『竹取物語』との出会いに書き加えておくべき項目は次の二つだろう。

- ① 文学とジェンダーが切り離せないものであったこと
- ② 普遍性や共通性、連続性を読み取っているのはあくまで現代の読み手であること

①は、実は『枕草子』を学ぶ上でしばしば言及される(注14)。

国語教科書は、女性ジェンダー側に属していた作り物語を「古典」の代表として採用しているのであり、このイメージを千年前から連続していたものとして伝えるべきではない。同時に、男性ジェンダーに属するものとしての漢文学習の意義についても学問という点から示しておく必要がある。

②の読み手概念は、中学一年生には確かに難しい。しかし、第二節で述べたように平安時代のある層の人々がかぐや姫の行動を理解しがたいもの、時代錯誤のものとして判じていた可能性があったように、読み方は簡単に変化するのである。古典は普遍性に保証されるのではなく、差異と反覆の中で作り上げられている。ことさらに「現代に通じる心」を示す必要はない。

『竹取物語』の教材価値は確かにあるが、一面的な平安文化礼讃に終わっては、確実に見落とすものがある。それを「読めば伝わる」というような感傷的なもので回収しようとするのではなく、相手が中学生であっても真摯に言語化し、語っていくことが求められている。

おわりに

『竹取物語』が古文入門教材として本当に魅力的であるのか、断言はし難い。だが、少なくとも物語文学にとつては魅力的であり、さまざまな作品に繰り返し引用されながら新たなイメージを獲得していった物語であるといえよう。たとえ『竹取物語』の存在さえ『源氏物語』の創作であったとしても何の問題もない。良き古典の読み手を育てるといふ点からいえば、必ず読んでおいてほしい作品である。

だが、そうした我々の思いがあるからこそ、提示することには慎重でありたい。仮名文学を中心において古典を論じていきたいとする姿勢は明らかに一面的なのであって、入門期の生徒に植えつけるべき感覚ではないだろう。「伝統的な言語文化」の体系的な学習は、とりあえず作品に触れてみようというレベルの出会いを小学校へ引き下げた。中学校では、その先からのスタートが許されている。現代の言葉のあり方や文化が『竹取物語』を入門期に最適な作品であると判断させていること、そして我々教材を提示する側（同時に我々もまた継承させられた側である）が自分の感覚という都合によって子どもたちに古典イメージを形成しようとしていること、そうした古典学習の背後にあるものを開示していく時がいま来ているのである。

※『源氏物語』引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）により、表記等を一部改めている。巻名・巻数・頁数を○内に示した。

注

(1) 『竹取物語』を教材として掲載する小学校教科書（平成二十七年版）は、全五社中、教育出版、三省堂、東京書籍、光村図書（四社）すべて冒頭で、三省堂のみ三年生の「学びを広げる」に掲載し、ほかは五年生の教材として掲載される。旧指導要領版よりも掲載は増加傾向である（なお、教科書については小中ともに出版社の五十音順で並べることとする）。

(2) 【教出】は東海道中膝栗毛、【三省】は枕草子・徒然草・平家物語の冒頭、【東書】は伊曾保物語、【光村】はいろは歌が先行す

る。

- (3) 漢文入門教材の定番は故事成語で、「矛盾」は五社すべてに共通するが、「五十歩百歩」「大器晚成」などの掲載もあり、また漢文学習から単なる言葉の学習として扱うものまで知識面での扱いも広い。作品やジャンルに固定されないという点でも古文学習とは異なる。ただし、漢文は高校に至るまで歴史か思想に片寄った学習になり、漢詩は中学でやるだけという場合も多い。
- (4) 一行目に示したのが教材のタイトル、以下、掲載内容を簡単に示した。「冒頭」は「今は昔」から「うつくしうてあたり」までが中心であるが、養うところまで載せる【東書】、中略を挟んで成人まで載せる【教出】などがある。「昇天」や「末尾」についてはかなり差があり、富士の語源を扱うか否かなどは大きな問題を孕んでいよう。別稿において改めて考えたい。
- (5) 「↓」以下は稿者によるまとめである。文中の／は改行を示し、○内の注および傍線、二重線は稿者による。
- (6) 関敬吾『昔話大成』（角川書店）でも「かぐや姫伝承」と位置づけられるものは少ないとされている。類話を掲載するのも『海道記』や古今集注釈などであり、やはり民間伝承とは異なるところで成立、受け継がれてきた物語であろう。福田孝『古典教材としての『竹取物語』』（『全国大学国語教育学会発表要旨集』一二五 二〇一三・一〇）参照。『竹取物語』を含めた「古典化」の問題としては、やはりハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典』（新曜社 一九九九）を挙げておきたい。
- (7) 新井信之『竹取物語の研究・本文』（国書出版会 一九四四）以来、天理図書館蔵本が最も古いものとされており、このほか古筆切や絵巻など中世のものがいくつか知られる。近年、研究が進みつつあるが、確固たる善本はないといえよう。
- (8) 絵合巻では、絵合は二度行われている。一度目は女たちの空間で、結果なども公にはされないが、二度目は帝も在籍する男たちのイベントとなる。当然、提出される作品も異なり、女たちにとつて重要であった物語内容という問題は、男たちの公式なイベントの中では発言権を与えられない。
- (9) 右方の主張する阿倍のおほしの「あへなし」は『竹取物語』本文の言葉遊びを巧みに利用する。車持の親王の「まこと」を知りながら「いつはり」玉に瑕をつけたとの言い回しも、『竹取物語』に対する深い読み取りに由来する。右方の主張がより強く見えるのは、相手方の作品の良き読み手として述べるからである。
- (10) なお、絵の蒐集にあたり光源氏の支援する斎宮女御（左）方は「古き」ものを、対する弘徽殿女御（右）方は「今めかし」きものをという棲み分けがなされている。絵合巻の読みについては拙稿『源氏物語』絵合巻の政治力学』（『中古文学』八八 二〇一・一二）参照。
- (11) 『竹取物語』が明らかに引用される作品は、『源氏物語』のほか、『夜の寝覚』や『浜松中納言物語』、『狭衣物語』などである。いわば『源氏物語』の正統な後継者達の世界で享受されている。
- (12) 『竹取物語』の教材化をめぐる近年の論としては、古田雅憲「竹取物語」授業化の構想』（『西南大学人間科学論集』八一 二〇一三・二）、菊地圭子「古典学習における教材開発に関する研究…古典を絵本で紹介しよう…『古典単元学習』の事例を通して」（『東京学芸大学附属竹早中学校研究紀要』五二 二〇一四・五）等。

- (13) 総合巻を掲載する高校教科書は確認できていない。高校での教材化の可能性を指摘するものもある(有馬義貴「文学史教材としての『源氏物語』「総合」巻」『早稲田大学国語教育研究』二九 二〇〇九・三)が、中学校での掲載、学習は恐らく難しい。
- (14) 女性と漢詩文の問題は、清少納言の人物像とともに(あるいは紫式部との比較において)コラム的に言及するものが資料集などに見られ、また類する学習が社会科に取り込まれているのも事実である。

※本稿は平成二十七年科学学研費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

(もととし・ひろみ/日本学術振興会特別研究員)